

2018年 中学校の部 最優秀賞

8時15分を読んで

広島県広島市 広島学院中学校 2年生  
高木 勇仁（たかぎ はやと）

1945年昭和20年8月6日午前8時15分、広島に原子爆弾が投下されました。たった一発でヒロシマは焼け野原と化し、鼻をつまみたくくなるような異臭が漂っていたそうです。ある小さな男の子は、それと分かる形を残して炭となり、また、ある女の人は一人の子供を失いました。そんな生き地獄の中、この本の著者の父、進示さんと祖父の福一さんも被害に遭っていました。ショック状態から目を覚ました福一さんは、原爆によって破壊された我が家を見て、

「建物疎開の手間を省いてくれたのお。わっはっはっは。」

と冗談を交えつつ笑いました。建物疎開とは、空襲による火災の延焼を防ぐために建物を取り壊して空間を作る作業のことです。当時、彼らはこの作業に取り組もうとしていました。

それにしても、もし僕が福一さんと同じ状況に遭っても、到底笑うことが出来ません。それは当然なことだと思います。しかし、福一さんは笑い飛ばすことが出来たのです。何故なのか。それは福一さんの日々の生き方に答えが隠されていると僕は思っています。

彼は「許す心」を持っていました。たとえ、どんな時でも人を恨むことはありませんでした。広島東照宮で出会った二人の兵士の邪悪な行為について、進示さんが文句を言うのとそれには同意しますが、決してズルズルそのことを引きずらず、他の人の親切があったからここまで来れたということを進示さんに思い出させました。そう、福一さんは残虐な行為をした兵士まで許したのです。

ところで、「許す心」は、ただ単に過ちを犯した人の罪を追求するのをやめることを指すのではなく、もっと、もっと大きなことを指すのだと思います。「恨めしい過去に重点を置かず広い視野で未来を見据え、過ちを犯した人々と共存しようとする心」、これこそが「許す心」なのではないでしょうか。実際、この心は進示さんへと受け継がれていきました。

福一さんの死後から40年後、進示さんが原爆資料館に寄贈した福一さんとの唯一の形見であった懐中時計は国連本部へと移されましたが、盗難に遭ってしまいました。これに対して著者は震える声で進示さんに電話をかけましたが、彼は

「章子、まあ、怒るな。人を憎んだらようない」

と、まるで福一さんのように娘を落ち着かせました。この行動に、僕は素直に驚きました。亡くなった父の唯一の形見が盗まれたときまで動揺しない者はいないでしょう。もちろん進示さんも動揺したはずですが、それを表に出せば、父の「許す心」に逆らう事に

なります。やはりその心は息子へと受け継がれていったのです。もちろん、進示さんの娘の著者にも受け継がれていき、今後、絶えることなく次の世代へと、福一さんや進示さんの願いと共に伝承されていくことでしょう。

また、「許す心」は美甘一族だけでなく、僕たちのような若者こそ、学ぶ必要があり心に留めておくべきものだと思います。

今現在、世界各国は自国の利益を第一に考え、互いに譲ろうとせず、自分の主張を押し通すばかりです。狭い視野が世界を争いに巻き込んだのではないのでしょうか。「許す心」を持っていなかったから、世界を争いに巻き込んだのではないのでしょうか。あの日、ヒロシマで起きた出来事から学んだ「許す心」はどこに行ってしまったのでしょうか。やはり、若い僕らが世に広めていくべきなのです。

とはいっても、今すぐに僕らが世界のやり取りに首をつっ込んで「許す心」を説くのは限りなく不可能に近いでしょう。先程、「許す心」はもっと、もっと大きなことを指すというような表現をしましたが、これには少し間違いがあります。僕はどんな小さな出来事までも「許す心」を持って接する事が最も大切だと思います。

例えば、自分と仲良しな A 君が、あまりしゃべったことのない B 君と喧嘩をしたとしましょう。よく話を聞いて、物事の全体像をつかむ事が大事なのです。そして、たとえ B 君が悪くても彼を拒絶するのではなく、共存しようと心掛けなければなりません。これが「許す心」です。

このような小さな「許す心」が積み重なり、やがて大きな「許す心」となるのです。

ですから、僕らのような若い人々が日頃から「許す心」を持ってたくさんの出来事に接し、その輪を世界へ広げていきたいです。